

2012インターバイク・ラスベガス展 参加報告

平成24年10月1日
財団法人自転車産業振興協会
国際業務部、統括事業部

米国最大の自転車展示会であるインターバイク・ラスベガスが今年も開催された。この展示会は今年が第31回目の開催である。本年の米国自転車市場は春先の天候が非常に温暖で自転車の販売が好調だったため、需要が先食いされ、本年後半の販売が先細りとなるのではないかとの見方もあった。しかし実際に展示会が開催されて見ると、入場者数及び来場小売店数とも昨年を大きく上回り、にぎやかで活気のある展示会となった。出展者の多くも、商談は活発で米国自転車市場は意外と強含んでいる印象を持ったと話していた。会期は3日間であったが、特に初日・2日目は非常に多くの人々が来場し歩くのが困難な箇所もあった。本年後半から来年にかけて米国自転車市場への明るい期待を抱かせる展示会となった。

展示会事務局によると、我々の目的は2013年新製品紹介の場を提供し、セミナーやパネルディスカッションを通じ新しいビジネスモデルに関する知見を深めてもらい、業界内頭脳集団のネットワーク化を図り、自転車関連事業に資する事であるが、この目的を達成することができた、と総括している。

展示会の概要

展示会の名称：インターバイク国際自転車展 (interbike INTERNATIONAL BICYCLE EXPO)

会 期：平成24年9月19日～21日 (アウトドアデモと呼ばれる屋外新モデル試乗会が9月17日・18日に実施された)

会 場：米国ネバダ州ラスベガス市 サンズ・エキスポ・アンド・コンベンションセンター
主催者名：ニールセンススポーツグループ

入場者数：25,536人(去年は23,270人、昨年比約10%増)、来場小売店数4,160店(去年は3,975店、昨年比約5%増)、来場バイヤー数は昨年比6%増

アウトドアデモ来場者数：昨年比10%増で過去最高を記録

尚この展示会はビジネスに特化した展示会であり、一般ユーザーの入場は対象とされていない。またメディア登録をした人以外は会場内での写真の撮影も禁止されている。

1. 活気に満ちた展示会

9月19～21日の3日間、サンズエキスポ&コンベンションセンターの1階・2階フロアにて、インターバイク展が開催された。今年もフィットネス機器の展示会と合同開催の形を取っており、多くのブースと来場者で非常に賑やかな会場となっていた。



出展者受付

(1) 完成車の展示

大手完成車、パーツメーカーは2階に集約され、1階は比較的規模の小さいメーカーやフィットネス機器が出展しており、子供用BMXコースや電動自転車専用デモコースも設置されている。しかし、いくつかの大手完成車メーカーは、独自に販売店向け商談会を開催しており、完成車メーカーの大型ブースは少なかった。

例年のことだが、各社とも集客に様々な趣向を凝らしており、ビンゴゲームを実施し、当選者には高級ロードバイクフレームをプレゼントしたり、マリオ・チッポリーニやエディ・メルクス等、自社ブランドの象徴と呼べる人物のサイン会を行ったりと、各社様々な趣向を凝らしていた。また、ツール・ド・フランスやジロ・デ・イタリア等のビッグレースで活躍した選手が使用した機材を扱うメーカーは、活躍した選手の写真や実際に使用した機材、サイン等を前面に押し出してPRしており、ビッグレースが市場に与える影響力の大きさが窺えた。

ロードバイクの新年度モデルは、モノトーンや単色基調に差し色を使用するなど、全体的に落ち着いた配色が目立っており、サイクルウェアやシューズ等も含めて、原色を多用した派手な色使いより、シンプルなデザインが主流となっていた。

また、ハイエンドモデルのロードバイクには、フルカーボンフレーム+最上位コンポーネントの組み合わせが多く見られ、従来の流れを踏襲した仕様が目立った。そんな中、最新鋭の技術をふんだんに投入したTTバイクよりも、クロモリやスチール製フレームで、大型キャリアを搭載したトラベルツーリング車や、ミニベロ等の自転車の展示が多かった。それに合わせて自転車本体と色を合わせたサドルバッグやボトルゲージ、オリジナルプリントウェアやサイク

ルキャップ等も多数展示されており、様々な自転車の楽しみ方が増えてきていると感じられた。

ロードバイク用ホイールは、50～100mm と、かなりリムハイトを高め設定したメーカーが多く、アルミ製リムハイトを装着させ、通常のブレーキシューでも使用可能としたり、W0 タイプをラインナップに入れたり、リムハイトの高いカーボンホイールに馴染みの薄い一般ユーザーに対して、使い易さに考慮した配慮が見られた。

カラフルな配色のシングルスピードも多数展示されており、アメリカでの人気の高さが窺えた。以前はシングルスピード展示車には、ブレーキが装着されていないケースが多かったが、今年は前後共ブレーキを装着したシングルスピードが多く見られたのが印象的だった。

MTB はアウトドアデモと同様、各社 29ers モデルが展示の主流となっている他、リジッタタイプやシングルギアモデルも多く見られた。

アウトドアデモ会場ではシクロクロスの人気が非常に高かったが、展示会場でもシクロクロスバイクの展示車はやはり多かった。日本でも少しずつ人気が高まっているシクロクロスだが、ここアメリカでも根強い人気があるようだ。

(2) 部品・付属品等の展示について

完成車以外でも様々なパーツ・食品・アパレルなどが出展しており、各種高級部品は勿論の事、自転車の廃材を再利用して作ったアクセサリや鞆、グミやクランチチョコレートとして食べやすく改良した栄養補給食品など様々な自転車アイテムが展示されていたほか、スマートフォンのアプリを利用したサイクルコンピューターや GPS を搭載したサイクルコンピューターを出展する、自転車業界以外からの出展企業も目立っていた。

アパレルの中では、ここ数年で広く一般ユーザーに浸透してきたコンプレッションウェアの展示が多く、中には低価格高機能を謳うメーカーも見られた。高価格な商品が多いコンプレッションウェアだが、低価格高機能を謳う商品が多数ラインナップされており、この市場も今後ますます活性化していくと思われる。

また、イタリア・中国・台湾・日本が会場内で共同出展の形を取っており、各国趣向を凝らした装飾で来場者の目を引いていた。特にイタリアはセンスの良い配色とライトアップで展示会場の中でもひと際目立っていた。日本は最低限の装飾でこれら共同出展の中では地味な印象だったが、各ブースともに商談は活発に行われており、日本製品の人気の高さを物語っていた。

なお、展示会全体を見渡して、賑わいに偏りが見られたように感じられたほか、時間帯によっても全体的な来場者の波があった。また、各ブースで配布する製品カタログや商品サンプル、ノベルティが少なく、例年の展示会と比較すると、この点は少し寂しい雰囲気もあったように思われた。

更に、展示会場のブースレイアウトにも若干偏りがあるように感じる。過去の経緯との関係でやむを得ないところもあるであろうが、日本で開催される自転車の大型展示会では、人気の高い大手完成車メーカーを会場の四方に配置し、中心に小規模なマイナーブースを展示するようにしている。こうすることで、来場者がまんべんなく会場内全てのブースに行くようにし

ているが、インターバイクのブースレイアウトだと、入り口付近に主要完成車・大手パーツメーカーが集まっていて、これでは来場者の動線が偏ってしまうのではないだろうか。

2. アウトドアデモについて

インターバイク展開催に先駆けて、9月17～18日の2日間、インターバイク展会場であるサンズエキスポ&コンベンションセンターよりシャトルバスで30分程度の場所にあるボルダークシティー、ブートレグ・キャニオンでアウトドアデモが開催された。

参加者の多くは展示会場から定期的に出発しているシャトルバスで会場まで移動していたが、中には自家用車で参加している参加者も見られた。

会場内には完成車メーカー、パーツ等のブースが立ち並び、最新鋭の機材を豊富に取り揃えて参加者を迎えている。参加者は自分が試乗希望のメーカーブースで試乗車を借りて、各試乗コースでテストライドすることが出来る。

完成車メーカーによってはヘルメット、専用シューズの貸出も行い、手ぶらでも乗車できるようにしている所もあるが、参加者の大半は自分の使い慣れたヘルメットやシューズを持参して試乗していた。参加者の中には多種類のクリートを用意し、それぞれのペダルでの走行性能を確かめている人もいた。

参加者の様々な要望に対応するため、各完成車ブースには専属のメカニックがおり、ペダル交換からハンドル角度、サドルの前後左右位置の調整、体重に合わせたサスペンション空気圧の調整まで、実に丁寧な調整を行っていた。

また、40度近い気温と乾燥した気候で疲弊した参加者のために会場内のいたる所で水やスポーツ飲料、アイスが無料配布されている他、飲食物を取り扱う企業のブースでは、日本価格で1本200～300円の栄養ジェルやスポーツドリンクを惜しげもなく配布しており、参加者の潤いに貢献していた。

ここブートレグ・キャンプは世界的に有名なMTBパークということもあり、MTB中心の試乗コースが多く、クロスカンントリーコース、ダウンヒルコース、BMX・4X専用コースなどが完備され、参加者は様々な走行環境で自転車の性能を確認することができる。クロスカンントリーコースは3つのコースから成り、2km程度で回れるコースから、起伏に富んだ10km超のシングルトラックまで、ライダーのレベルに応じてコースを選択できるようになっている。

その中で特に圧巻なのがダウンヒルコースである。大型トラックの荷台にライダーと試乗車ごと載せて標高1,000m超の山の上まで移動。山頂から下の会場まではかなりの急坂で、場所によってはタイトなカーブがあり、またガレ場でのスリッピーな路面は高度なテクニックを必要とするコースとなっており、ダウンヒル走行に慣れていないと完走することすら難しく、途中で自転車を押して下山している参加者も見受けられた。このダウンヒルコースは特に指定されたルートがあるわけではなく、参加者は各自の判断でトラックを、ジャンプ、急停車など、サスペンションやブレーキ、フレーム剛性の確認を行いながら下山していた。中にはまったくトラックとして整備されていない山肌を、自転車を担ぎ上げて登り、ガレ場の岩々を飛び渡り

ながら下っていく猛者もいた。

オンロードバイクの試乗コースは、舗装路周回コースが設定されており、一応周回コースになっているが、折り返し地点に案内標識やバリケードなどは一切設置されておらず、参加者の気が済むまで走り続けることが可能となっている。中には片道 30km を過ぎてもなお走り続ける参加者もいた。この試乗コースは単なる平坦路ではなく、起伏に富んだ幅広のコースとなっており、参加者は集団走行やスプリント走行、ダンシングなど様々な走行状態でオンロードバイクの走行性能を確認していた。これだけ長く走れる試乗コースにも関わらず、途中で補給ポイント等は一切なく、この試乗コースを走るには各自で水分補給やパンクトラブルに対応した準備をする必要がある。

全体を通じて試乗車は MTB、シクロクロスを中心としたオフロード自転車が多く、日本でも主流となりつつある 29ers 仕様の MTB が多くみられ、参加者の多くも 29ers を試乗車として選択しているケースが多かった。また、ロードバイクは各社とも中級以上のモデルには電動変速機が装着されているケースが多く、その構造や価格、メンテナンス方法をメーカー担当者に熱心に聞き入る場面が見られた。

また驚いたのは、前後ホイールまで含めると日本円の完成車価格で 100 万円を軽く超える超軽量フルカーボンロードバイクに巨体のアメリカ人参加者が乗車し、砂利道を遠慮なく疾走する姿を実に平然とメーカースタッフがみつめていた事である。大らかなアメリカ人の気質を垣間見ることが出来た。

値段が高価だからと言った理由で遠慮して試乗しては、その自転車本来の性能を理解することは難しい。やはり実際の使用状況に限りなく近い走行距離や状況で試乗してこそ、販売店はお客様により正確な商品情報を伝えることが出来るのだと思う。そういった意味でも、このアウトドアデモは試乗会として実に理にかなった形態と思われる。

また、インターバイク展にブース出展していない完成車メーカーが、アウトドアデモには参加しているケースがあり、直接触って乗って販売店自らの感覚で商品を見定めることに重点をおいているアメリカ市場にとって、アウトドアデモの重要性が垣間見えた。

展示会事務局の発表によるとアウトドアデモの来場者は過去最高との事であるが、今年のアウトドアデモは、例年に比べて来場者が少なくなっているように感じた。以前ならもっとも来場者が多い 2 日目など、シャトルバスの待ち時間が 30~40 分かかることもあったが、今年は並ぶこともなくスムーズに乗車することができた。また、大手完成車メーカーのオールマウンテン系 MTB 等の人気車種は、一度貸出しで出払ってしまうと、戻り待ちの行列ができる程だったが、今年のごく一部のメーカーを除いて、概ね待たされることなく、スムーズな試乗が可能であった。



会場入口



DH用コース運搬トラック



DHコース



XCコース

3. 小売セミナー

今年も展示会に併せて米国自転車小売協会（NBDA）主催によるセミナーが、18日から21日にかけて展示会会場の会議室を用い開催された。マーケティング、価格戦略、消費者志向、自転車産業の現状等幅広い内容を含む60種のセミナーが開催された。

当協会の月次レポートを執筆しているジェイ・タウンレイ氏も20日の午後4時半から1時間半にわたり発表を行った。内容は、米国自転車市場の現状を紹介し、過去からの推移と関連付けた上で、今後の動向について、消費者の人口構成が米国自転車市場に大きな影響を与えてくるというものであった。そして、各世代の人口構成の関係から当面は主要販売対象となる消費者層の数が減るので、各々の世代に合わせ魅力ある商品を提供することが重要である、若い世代が主要自転車購入層となる8~10年後に1973年以來の自転車ブームがやってくることを期待される、その自転車ブームがどれくらいの規模になり、どういった車種が売れ、どの程度

の利益を享受することができるかは、皆の努力次第である、と総括された。



4. 来年のインターバイク展について

今年も展示会事務局から、来年のスケジュールについて早々に発表された。2013 年は会場をラスベガス市内の別のコンベンションセンターである、マンダレイベイ・コンベンションセンターに移し、会期は9月18日～20日の予定である。またアウトドアデモはこれに先立つ9月16日、17日に開催されることになっている。

5. 当協会の出展状況について

当協会は、今年も12小間を確保し共同出展を行った。今回の共同出展企業は、株式会社ヨシガイ・株式会社本所工研・株式会社インタージェット・株式会社加島サドル製作所・株式会社マルイ・株式会社三ヶ島製作所・株式会社日東・株式会社スギノエンジニアリング・株式会社タンゲセイキの9社であった。本年も引き続きインターバイク事務局に依頼し、他国の共同出展と同様、各共同出展企業名・住所・電話及びファックス番号・ウェブアドレス及び取扱製品区分をフロアプランや展示会ガイド及び展示会HPに掲載してもらうようにしている。本年は今までにないほど各社とも多くの来場者に恵まれ、活発な商談・営業活動を行っていた。是非来年もお願いしたいという声を多くいただいた。

イタリアや中国、台湾等他の国・地域の共同出展に比べると規模は小さいが、小間が非常に良い場所に確保できており好評である。また小間の装飾については、最低限のものしか行っていないが、各社の展示製品のグレードが高いので、小間の装飾が多少貧弱でも来場者は数多い。今後もできるだけ多くの共同出展企業を集め、できれば更に規模を大きくした共同出展を行っていきたいと考えている。

2012インターバイク・ラスベガス展当協会共同出展企業一覧

出展社名 (英文名)	住 所	電話 F A X	主な出品物
株式会社 ヨシガイ DIA-COMPE JAPAN	〒571-0008 大阪府門真市東江端町 7-25	072-884-8020 072-884-8030	ブレーキ、ヘッドセット等
株式会社 本所工研 Honjo Koken	〒130-0003 東京都墨田区横川 2-19-10	03-3625-2431 03-3625-2433	フェンダー
株式会社 インタージェット Interjet, Inc.	〒532-0004 大阪市淀川区西宮原 2-7-38	06-6393-3611 06-6393-3822	フレーム
株式会社 加島サドル製作所 Kashima Saddle Mfg. Co., Ltd.	〒580-0014 大阪府松原市岡 1-116	072-333-3594 072-333-1973	サドル
株式会社 マルイ MARUI LTD.	〒658-0024 神戸市東灘区魚崎浜町 27-1	078-451-9100 078-431-9500	タイヤ、ペダル、サドル等
株式会社 三ヶ島製作所 MKS	〒359-1166 埼玉県所沢市糞谷 1738	04-2948-1261 04-2948-1265	ペダル
株式会社 日東 Nitto Co., Ltd.	〒334-0013 埼玉県川口市南鳩ヶ谷 3-23-7	048-286-7771 048-286-7770	ハンドル、シートポスト等
株式会社 スギノエンジニアリング SUGINO	〒630-8144 奈良市東九条町 287-1	0742-62-5311 0742-62-5320	クランク、チェーンリング等
株式会社 タングセイキ Tange Seiki	〒590-0940 堺市堺区車之町西 1-1-26	072-224-9990 072-224-9991	ヘッドセット等



株式会社ヨシガイ



株式会社本所工研



株式会社インタージェット



株式会社加島サドル製作所



株式会社マルイ



株式会社三ヶ島製作所



株式会社日東



株式会社スギノエンジニアリング



株式会社タンゲセイキ



当協会

以 上